

みなさん、おはようございます。関西では梅雨に入ってひと月が経ちましたが、お元気でお過ごしでしょうか？教会では昨年の2月以来、礼拝堂のエアコンが一台故障して、夏の茹だるような暑さと、冬、特に1月・2月の底冷えの寒さに、コロナ禍にあって換気をしながら耐え抜いた1年と約4ヶ月でしたが、先週火曜日に無事にエアコンの設置工事が終わり、今日からは快適な環境の下、共に礼拝をささげることが出来ますことを主に感謝したいと思います。また、大阪では今日から緊急事態宣言が解除となり、まん防に移行しておりますが、油断することなく、出来る限りの感染予防対策を講じながら、閉会中の諸集会在が少しずつ再開する道が開かれますようにと願っています。ワクチンの接種が効率良く、幅広い年齢層にまで行き渡りますように祈るものであります。

さて、本日の聖書箇所はマルコによる福音書4章の後半部分、「種を蒔く人」のたとえに続く、「ともし火」と「はかり」のたとえの場面からとなります。最初の「ともし火」(ランプ)のたとえでは、主イエスはご自身をランプの明かりになぞらえて、ご自分がこの世に来られたことが、神の国の奥義を明らかにするためであることを教えるために、このように言われました。「せっかく明かりを灯したランプに、わざわざ箱をかぶせて、光をさえぎる人などいるのでしょうか？もちろん、そんな人はいないでしょう。そもそもランプは、台の上に置いて、周囲を照らしてこそ、その価値が発揮されるものです。」

(21～22節)と。私たちの日常生活で欠かすことの出来ないランプの明かりになぞらえて、弟子たちに示唆を与えられたのであります。昨年の秋、立て続けに鳴り渡る激しい落雷にともない、教会が一時的に停電状態になった際には、改めて電力に依存した今の私たちの生活を振り返る機会となりました。関電の作業員の方々がみえた夜の8時過ぎまで、蒸し風呂状態で、家族3人懐中電灯の明かりを頼りに、翌朝まで暗闇の生活を覚悟しましたが、配電盤辺りの作業と共に礼拝堂のシャンデリアの光がパッと明るく灯った瞬間の喜びは、いまだに忘れることが出来ません。

主イエスは別の箇所で、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」(ヨハネによる福音書8章12節)と言われましたが、闇に覆われたこの世界において、隠されたかたちで示された神の国の奥義も、必ずいつの日か明らかにされる時が来るということを教えられたのであります。また、ご自分がこの世界に来られたのが、神の国の秘儀を明らかにするためであり、現在それが現れ出て、輝きを放っているのであるから、心の耳をそばで聴くように、とも言われました。2番目の「はかり」のたとえについては、主イエスは先ず「何を聞いているかに注意しなさい。…」と忠告した上で、このたとえについて語られました。「…あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられ、その上になお増し加えられるであろう。だれでも、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。」(24～25節)と言われました。主イエスはこの所において、どのようなことについて言われているのでありましょうか？おそらく主イエスは弟子たちに向かって、各々の人生の中での均衡・バランス感覚の大切さについて教えておられるのだと思います。主イエスはあの山上の垂訓の中で、「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。」なぜならば、「…自分の量るはかりで量り与えられる。」(マタイ7：1)からと言われましたが、ここでいう「はかり」というのは、人を判定する審判の尺度(判断基準)についてではなく、神様がお与えになる恵みの尺度を意味しています。

つまり、私たちがみ言葉を受ける心の升が小さく、狭いものならば、その結果もたらされるみ言葉の恵みも小さなものとなるが、私たちが心を開いて、信仰の目を押し広げるならば、神はその事を喜び、祝福して下さり、神の国の奥義は必然的に明らかにされるであろうと言うのであります。おそらく主イエスの許へと押し寄せてきた大勢の群衆たちの多くは、不治の病を癒やし、悪しき霊を追い払う主イエスに対して、ある種の魅力を感じて集まっていたのだと思いますが、主ご自身の一番の願いは、人々が御利益を求めて生きることよりも、神の国を求めて生きることでありました。それ故、あなたがたが真剣に神の国を求め続けるならば、求める以上の恵みが与えられるでしょう。また、聞く耳のある者は神の国の恵みをさらに与えられ、祝福に祝福が増し加えられるでしょう。けれどもその一方で、聞く耳を持たない者は、神様の祝福からもれてしまうばかりか、福音を聞くチャンスまでのがしてしまうでしょう、と告げられたのであります。この2つのたとえは直接的には、主の御許に集まった群衆たちについて述べたものでありますが、時代を越え、国境を越えて、今の私たちにも当てはまる普遍的な教えと言えるのではないのでしょうか。

続く4章26節以降34節まで、さらに2つのたとえについて書かれていますが、最後にこの前半部分の「成長する種」のたとえについて注目して見たいと思います。神の国が勢いよく成長し、実を結ぶ様子を麦の成長過程とその収穫になぞらえて、このように描かれています。「ある農夫が畑に種をまき、家に帰りました。日が経つにつれて、特に何もしなくても、種はみるみるうちに成長してゆきました。豊かな土壌において、まず種が芽を出し、次に穂が出て、その穂の中にたくさんの実ができます。そして、その実が熟すると、農夫はすぐにかまを入れます。収穫の時(ハーベスト・タイム)が来たからです。」と。大地にまかれた種が、知らないうちに芽を出し、育ってゆくというこの主イエスのたとえは、どのような事を意味しているのでしょうか？それは神の国とその教えも、この大地に蒔かれた種のように、人の思いや力の及ばないところで、どんどん進展し、発展してゆくということを教えてくれています。「土はひとりでに実を結ばせる…」(28節)というのは、人間の力を越えたところの、目には見えない神様の力が働いているということを表しています。このことは神の国が歴史の中で、神様ご自身の力によって大きくなっていくということを指し示していると同時に、人々の魂の収穫の時、救いの時も、究極的には人手によらず、神様ご自身のなせる業であることを私たちに教えてくれています。私たちが、ある時、ある人に誘われて教会の門を叩いたというのも、その背後にいて働いておられる神様の永遠のご計画であるということを示しています。み言葉を聞いて、すぐさまキリストを自分の主と告白するのではなく、長い求道生活を経て主を信じ受け入れ、信仰告白に至るというのもまた、主のご計画の一つであると言えます。旧約のコヘレトの書3章に、「すべてのことには定まった時期があり、天の下すべての営みに時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を抜くのに時がある。」(1～2節)とありますように、収穫の時は全能の神様のご計画の中に、すでに定められているのであります。

この月も後半に入っていますが、時宜に適った時々に応じて私たちに恵みの雨を降らせ、日の光を降り注ぎ、私たちを成長へと導き、豊かな実を実らせて下さる主に信頼して歩んでゆきたいと思えます。やがて主が、まかれた種を豊かに刈り取って下さることを信じて、地道にこつこつと福音の種まきに勤しみ励んでゆこうではありませんか。